BROADCASTING CREATORS' ASSOCIATION OF JAPAN

放送人の会

No.54
2012.1.23

〒102-0094 千代田区紀尾井町１－１ 千代田放送会館 ３階
Tel&fax03-3221-0019 Mail info@hosojin.com 代表幹事 今野 勉
編集担当 伊藤雅浩（会報編集長）、鈴木典之、前川英樹（ＨＰ担当）、松尾羊一 事務局 佐藤 真美子

放送人の会、ことしの展望

会長 今野 勉

札幌での日韓中テレビ制作者フォーラムが無事終わって、さて次に何をすべきか、秋から暮れにかけて考えてきたことを、年頭にあたって私なりに整理して述べてみようと思う。会員の皆さんや当会を外から応援して下さるみなさんのご意見を待つところである。

課題は大きく整理して三つほどある。まず第一は、**会員の資格と入会の呼びかけ**に関するものである。

現在の会員資格は①放送の番組制作に携わっている人、携わったことのある人②放送文化に関心のある人③当会の目的に賛同する個人、となっている。

「放送人の会」と名乗っているのだから①は当然の資格で、現在、具体的には、番組のプロデューサー、ディレクター、記者、アナウンサー、制作技術者、美術関係者など制作現場のスタッフ、が主に会員となっている。

②に関しては、大学や研究組織の研究者、マスコミ担当の記者、評論家などの会員がそれに該当するものと思われるが、これらの専門家を「放送文化に関心のある人」と括ってしまうのはいささか申し訳ない気がする。

③は、すべての会員にあてはまることで、会の目的に賛同するというだけで入会した会員はいない。そもそも、それだけの理由で会員にしていいのか、という問題もあろう。

というわけで、①の資格は当然として、②の資格については、もう少し具体的に定義し直した方がいいのではないだろうか。③は推薦制度や資格審査で対応すれば済むことで、特に必要はない、と思われる。

実は、札幌での日韓中テレビ制作者フォーラムへ出品された番組のディレクターやプロデューサーが、かなり若い世代であり、若くてもそれなりの実績があり、制作者としての自覚もあることを、多くの会員が眼のあたりにして、そうした若い会員にも入会の機会を与えるべきだとの声が上がったのである。

それを踏まえて、20代の会員の会費を新たに設定したことは、前回の会報でもお知らせした。

で、ことしは、会員資格の新しい定義と入会の手続きを提案したいと思っている。そして若い世代も含めて新しい会員への呼びかけをこれから始めたい。近々その案を会員の皆さんにお届けするつもりなので、ご意見を賜りたい。

第二の課題は、放送人の会がこれまで**蓄積してきた文化的資産の活用化**である。

当会の事業のひとつである「放送人の証言」は、すでに160人以上の収録を終え、放送史を語るうえでの貴重な資料であることが各方面から指摘されるようになってきている。

幸い、ＮＨＫ放送文化研究所と東大情報学環が収録した映像・音声を文字化（活字化）する作業をそれぞれの費用負担でやってくれることになった。文字化されれば、証言が飛躍的に利用しやすくなる。と同時に出版や番組化にも道が開けてくる。

文字化の最終チェックの作業を会員の皆さんのボランティアによって完結したい、というお願いは、前号の会報でお願いした。引きつづき、会員の皆さんの申し出をお待ちしている。

「名作の舞台裏」「人気番組メモリー」「放送人の世界」「ドキュメンタリーワールド」の事業（イベント）も、多くの貴重な放送史の文化的資産となっている。多面的な利用を考えていきたい。

第三の課題は、**当会の法人化**である。日韓中テレビ制作者フォーラムの主催者として当会は各種の法人組織や行政から多額の助成金や支出を受ける当事者にならなければならない。だが、現状は任意団体であるため、それができず、非常に複雑な手続きをとっている。

ＮＰＯ法人など、何らかの法人組織を目指して名実ともに主催者となる必要がある。

以上、当面の三つの課題について述べた。ことしもまた、会員の皆さんの絶大なるご支援をお願いしたい。

新春所感

今年は…

石橋 冠

富山県の新湊という港町に、妻の実家がある。すでに主は亡く、ぼくたちが行かないかぎり空き家と化す。だが、今年は思うことがあり、そこを終の棲家と決めて改築を始めた。

日本海の向こうに、峻厳な立山連峰がせまる贅沢な風景があり、物価は安く、魚は格別に旨い。さらに映画のことテレビのことなど屈託なく語り合える友人も増えた。懐かし人情も健在である。いま、夢の郷にも想える。

この春は、東宝の舞台「菊次郎とさき」を演出するが、幕が上がったら新湊に生活の主軸を移そうと思っている。

昨年は、ただ孤愁だけが募った。親友の原田芳雄、市川森一が相次いで逝き、僕も生涯初めて体調を崩した。テレビ朝日のドラマ「愛・命」は、めまいや立ちくらみと闘いながら、やっと撮り了える始末だった。ストレスによる自律神経の失調という診断だったが、これからは休みたい、遊びたいと痛切に思った。

新装の家の目玉は漁船の通う運河に扉を開いた喫茶店まがいの部屋である。誰でも土足で出入り自由、珈琲は無料、喫煙可。そこのマスターを気取りながら、多くの人々と出会い、歓談し、厚顔にも映画のシナリオを書くことにトライしようか、と夢をみる。

諸兄も、北陸の旅の折には、ぜひ立ち寄っていただきたい。

****

送り手に受け手がついていけない時代

上村 忠

かつて米軍占領下の日本にはアメリカのFCCと同じく、こと放送に関する限り政府から独立して立法・司法・行政の三権を有した独立行政委員会＝電波監理委員会が存在した。

1952年、占領が終わり、日本政府に行政権が戻されると、たちまちこの日本版FCCは解体され、単なる諮問機関に過ぎない電波監理審議会に変わり、電波監理&放送行政は「国家の大権」として、当時の通信省に移管された。その後、電波監理委員会の復活はなく、放送行政は官僚の手に移り、今年はちょうど60年目に当る。送り手的受け手的にはどうか？

日本人の個人所得は、ヘリテージ財団調査によると、かつての世界2位から40位に落ちた。先進国では最下位。高齢化も進んでいる。高度成長期にはかなり無理が利いた。有料化を進め、受信コストをあげてもなんとかなったが、今は違う。かつては送り手優位、政策やシステムを変えるのも、送り手側の都合を優先させた。だが今ではそれがコスト増につながり、高齢者、離職者、低所得者の生活を崩壊させる。

これからの通信・放送政策は「受け手本位」で進めなければならない。これ以上、受信コストが上がったら、視聴者は昔の飢饉の難民のように「逃散（ちょうさん）」を始め、低コストの携帯・スマホ・インターネットへと逃げこみ、受け手なき一望の荒野に、むなしく電波が流れるだけになろう。

****

大学生が見ている番組

碓井 広義

先日、学生を対象にアンケートを行いました。質問はいたってシンプルで「いつも見ている番組1本とその理由」というものです。120人ほどの人数でしたが、結果は見事に分散していました。1票という番組がとても多かったのです。特にドラマは全体的に名前が挙がらず、最高が2票で4本ありました。そんな中、上位となった番組は以下の通りです。

6票「世界の果てまでイッテQ！」
5票「世界弾丸トラベラー」
4票「世界ふしぎ発見！」
「モヤモヤさま～ず」
3票「アナザースカイ」
「報道ステーション」
「プロフェショナル仕事の流儀」

まず目につくのはタイトルに「世界」と入ったものが3本並んでいること。さらに「アナザースカイ」も海外物ですから、世界・海外を見せる番組が上位5本中4本もあります。見ている理由として、「ちょっと得した気分になれる」といった内容を複数の学生が書いていました。ネット世代がテレビに接した際に感じる〝お得感〟とは一体何なのか。もう少し探ってみようと思っています。

****

百姓に定年はなし 汗かいて 塩にまみれて 今日も梅干す

テレビマンユニオン 大原れいこ

年が明けて、日本農業新聞の歌壇にのったというこんな一句が目にとまった。投稿者は90歳の男性だという。（「老いの歌」岩波新書）農業はしんどい作業だが、元気である限り年齢や老いに関してはバリアフリーだ。

「テレビ屋に定年はなし 汗かいて…」これってアリか？

たしかに映像制作というジャンルは、かなり自由度の高い職域だ。洋の東西を問わず、映画監督の衰えを知らぬ創作意欲は目を見張るばかりだ。

そういえば、この「放送人」の皆さまだってそうだ。

あ、もっと身近にだってひとり・・・テレビマンユニオンで席が隣りの今野勉さん。

この数年の今野さんの目覚ましい仕事ぶりは、隣りで見ていてただ敬服し、感嘆するばかりだ。

「今野さんってロケの時、真っ先に駆け出して、ガードレール飛び越えるんですよォ」と若いADも目を丸くする。

・・と正月早々目にした一句から、とめどなく連想の輪が拡がったところで私もやっと仕事モードにスイッチオン。

今年の初仕事は半年ぶりに指揮台に復帰する小澤さんのコンサート収録。

では、とスコアを拡げ、CDのスイッチオンするところで、そうだ一言・・・。

今野さん・・・、「放送人の会」のためにも、今年からガードレールは飛び越えないでくださいね。

****

今年の新語は〝特需〟

山形市　**大類　啓**

古来、東北は中央政府の支配と収奪におびやかされてきた。その構造は今日も変わらない。福島を訪れた野田総理に事故原発をかかえる双葉町の井戸川町長は「あなたは私たちを日本国民と思ってるのか」とパンチを浴びせた。屈服の歴史から来る抗議である。

メディアは国の予算執行を目前に「復興特需」を言い出した。

「特需」なる言葉には後ろめたさがある。日本の高度成長を下支えしたのは、朝鮮戦争とベトナム戦争がもたらしたいわゆる「戦争特需」だった。当時の子どもですら「トクジュ、トクジュ」と口にした経済復興は実は、アジア人のおびただしい血の流れでまかなわれたものだ。忘れてはなるまい。21世紀の「特需」はどうなるのか…。

松の内もギリギリ。山形放送の後輩から「芸術祭ラジオ部門優秀賞」の一報があった。シベリア抑留帰還兵の全国組織の高齢解散までをとらえたドキュメンタリー「それぞれの異国の丘」だ。彼らの敵は日本政府とロシア政府。各種審査会でも「戦争ものキライ」の流れがあった上、大地震も加わり今回はダメかな、と思っていました。分かってくれる人がいることは嬉しいものです。

寒中見舞。

****

音楽による日韓民間交流

大山　勝美

いま、日韓民間交流史を綴った「あの時、ぼくらは13歳だった」（東京書籍）の映像化にトライしている。

当会員の寒河江正氏と韓国天文学者羅逸星氏の対談と記録の共著である。寒河江氏は終戦（1945年）の年、北朝鮮の城津府の中学1年で、病院長の三男だった。

休み時間、朝鮮族の同級生が仲間に朝鮮語で囁った。当時は、日本語の徹底教育が厳しく強要されていた。聞き咎めた日本人同級生が「朝鮮語を使ったな！」と激しく問いつめる。正少年はそのとき「朝鮮人が朝鮮語を使って何が悪い！」と大声でかばい、その場は収まった。

その後、ソ連軍が侵入。正少年は船上脱出、引き揚げ、父方の故郷仙台での辛酸をへて、同志社大学に入学、コーラス部で活躍する。テレビ神奈川では佐藤しのぶの番組などを担当した。

1986年、寒河江氏に電話がかかる。韓国の羅さんがずっと逢いたいと探している、という。相手の見当がつかぬまま、ソウルにむかい、羅氏がかつての竹永少年とわかり、感激の再会をはたす。それから25年、家族ぐるみの交流、同志社大OBコーラス部は5回も韓国を訪問。今秋、韓国から合唱隊が合同音楽会のため来日の予定である。

「慰安婦問題」など逆風の時期こそ紹介すべきと、熱く取り組んでいる。

****

初日映え　六三四（ムサシ）を誇る　スカイツリー

荻野慶人

世界一高い（634㍍）自立式電波塔が、隅田川沿いの向島や亀戸など昔ながらの家並を見下ろして5月にオープンする。東武伊勢崎線の最寄り駅を「とうきょうスカイツリー駅」と改称するらしいが、「業平橋駅」のままが好いのに！江戸日本橋の空を東京オリンピックの前年（1963年）にハイウェイが塞いでしまったのとはまた違う、詩情の鈍感さが腹立たしい。

いつか『（押上）一丁目の朝陽』という映画が出来た時、聳えるタワーを背に駅名が「業平橋」なら、街の故事まで匂うようで観客の心が和む筈だ。

懐古趣味から憂うのではない。「断捨離」という言葉が流行る今日、現代生活を害する悪弊は容赦なく破棄したい。その最たるものが「世襲」だ。

北朝鮮は、絶対的権力者の天命を機に近代民主国家に脱皮してほしいと、一握りの既得権益保護グループを除く誰もが願っている筈だが、今のところネット革命など起こる気配もなく、亡君の遺訓だけを拠り所に28歳の若殿が新指導者に担ぎ上げられそうだ。

地盤、看板、鞄の古臭い殻を破って産声を上げた「どじょう内閣」は、お願いだから政権交代の期待を裏切らないでほしい。もしも短命に終わるようなら、死屍累々が無様な家元風貴族政権と変わらぬではないか。TVに生出演したハッタリのない庶民首相（週刊N新書）を観て「国民にどんどん語りかければ好いに！」と思った。

大阪に新市長の発声で「維新政治塾」が開講する。三バン無縁の精鋭育成が塾是だが、行列ができるだけのポピュリズムに終わらないことを切に望む。

「日本沈没」を防ぐ救世主は誰か！

****

「ママへ…。」音楽！

織田晃之祐

まなみちゃんが書いた言葉だ「ママへ。いきてるといいね　おげんきですか」。

音楽！私はこの言葉の直後に、音楽を付けたい。直後、いや音楽のスタートは

1拍おくべきか、いや1拍半か…。初発の音量は小さく、静寂の平衡が、ふと何かのはずみで変容したかの様に、その波動は、かすかに、そして確実に発信する。調性は、リズムは、テンポは…。しかし、あの未曾有の大津波である。私の愛用のシンセもまた一瞬にして消え失せる。作曲どころではない。それなら迷わずラヴェルだ。ピアノ協奏曲ト長調、第2楽章。演奏はマルタ・アルゲリッチにお願いする。

まなみちゃん。昆　愛海ちゃん5歳。「ママへ。いきてるといいね　おげんきですか」。この言葉は、行方不明のお母さんのために書かれたものだ。まなみちゃんの御両親と妹さんは、昨年の東日本大震災の巨大津波にのまれ還らぬ人となった。哀しいことである。「まなみ、愛海」…。海の大禍で亡くなったご両親は、最愛の我が子に、何の疑いもなく「愛の海」と、名付けていたのだった。

「音」は共振し響きあう。故に私は、その「音」の力、「音楽」の力を借りて、愛美ちゃんと共振し響きあい、祈る。そしてまなみちゃんが、御両親の命名した宇句どおりの、愛らしい、いとおしい…海の大好きな少女に成長することを夢みながら…今、マルタのレコードにそっと針をおとす。

北村　充史

****

がしゅん　2012辰年元旦

花と**竜**（1954ほか3部作）
第五福**竜**丸（1959）
拳銃無頼帳　抜き打ちの**竜**（1960）
丹下左膳　乾雲坤**竜**の巻（1970）
ドラゴン危機一髪（香港　1970）
緋牡丹博徒　お**竜**参上（1970）
竜馬暗殺（1974）☆
イヤー・オブ・ザ・**ドラゴン**（米　1985）
ミレニアム・**ドラゴン**・タトゥーの女（スウェーデン・デンマーク・独　2009）
☆印はおすすめ作品

****

石巻「震災土蔵」保存運動

木村　成忠

現在私は石巻市の大津波に耐え倒壊しなかった一棟の土蔵の保存運動に関わっている。この土蔵は海に近いため壊滅状態になった門脇地区にある。

去年5月、見渡す限り連なる瓦礫の山の間にすっくと立つ土蔵の健気な姿を初めて見て「よくぞ頑張った」と感銘を受けた。土蔵は明治29（1896）年の三陸大津波の翌年建てられたもので築115年になる。所有者の本間家は江戸時代には廻船問屋を営み明治期からは味噌醤油醸造業に転じていて、土蔵は当時のものである。

震災時には多くの建造物、古文書など文化財も失われる。一旦失われたものは元へはもどらないし、歴史資料の価値を認識していても、それを保存していくのは容易ではない。文化財指定を受けていなければ、費用は個人負担になる。当主本間英一さんも自宅を失くす被害にあったこともあり、震災直後は土蔵の解体を決めていたが、震災の悲惨さを後世に語り継ぐ重要さに思い至り、保存を決意された。

傷んだ屋根や壁の一部を補修しなければならないので、その費用200万円を寄付でまかなうべく「石巻震災土蔵メモリアル基金」をつくり寄付を呼びかけた。ありがたいことに全国から支援の手がさしのべられ、去年12月末までに目標をはるかに超える約350万円が寄せられた。

本間さんは土蔵の周辺も整備し、地区の歴史遺産として来訪者が観覧できる施設にしたいと話している。修復工事は建築業者の人手不足のため、着手できるのは3月以降になる見込みだ。

（石巻市出身　仙台市在住）

****

新春

重延　浩

誰もが新春を祝っていた2011年の姿が、あまりにも悲しい自然の反乱に出遭うことになりました。

思えばそれは人間に幾度も繰り返し起きていた歴史の宿命でした。

「人間のいろいろな状況が作っている軌道など、たちどころに一巡されるもの」とはゲーテの語った人間説。

予定調和を越えた昨年の運命に瞑想しつつ、やはり新春を祝います。新春はいつも幸福です。空の色は何も変わっていないのですから。

****

ふたつの日本語

菅野　高至

テレビの饒舌な虚しさに脅え、芝居小屋に通っている。昨年の秋、日本語の今を、ふと考える芝居を二つ見た。一つは宮田慶子演出、三島由紀夫作の「朱雀家の滅亡」（新国立劇場）。主役の國村隼はまだしも、ほかの役者の台詞が客に届かない。声は出ているが、意味を持った言葉として台詞が喋れないのだ。普段は使わないし、耳にもしない、戦前の高貴な方々の言葉だから、まあ役者が悪いだけでもない。私にしろ、三島の豊穣な戯曲は、この前、いつ見たかしらなのだから。

日本語がこのまま変ると、三島の流麗

な修辞を語れる役者も、味わう客もいずれは消えて、名作が名作たり得なくなるのだろうかと、ふと思う。

もう一つは、劇団「柿喰う客」の主宰者、中屋敷法仁の脚色演出の「女体シェイクスピア第一回『悩殺ハムレット』」（シアタートラム）。小劇場系の女優15人だけで、シェイクスピアの名作を演じる。上演時間は90分、普通の半分だ。お水の花道のホストとキャバクラ嬢の衣装で、今どきの若者の口語を使う。「チョー」「ヤバクネ?」「何とか的」「マジ、あり得なくねぇ!」などの言葉が、打ち込み音楽のリズムに乗って舞台上を疾走する。歌と踊りがある。アニメやゲームの世界だ。

台詞は女優たちの日常語だから、気持ちと台詞とに乖離はない。従って心情がよく伝わる。虫酸が走る変なニホン語の筈なのに、心地よく見てしまう、なんと言うことだと、ふと思う。

興味のある方は、4月上演の『絶頂マクベス』を、ご覧あれ!

初詣　露木　茂

新年おめでとうございます。

「紅白」のフィナーレの前に家を出て近くの神社へ初詣。いつも通りのわたしの1年が始まりました。しかし被災地東北では、千数百の寺と150の神社が流されたり大きな被害を受けたといいます。願を託す場が無くなってしまった人達も多いでしょう。

昨年対談した作家玄侑宗久さんの「東北では地域がこわれてしまったんです」というひと言が甦りました。

鶴橋　康夫

真っ青なる空に竜神おらが春
やり場なき怒りをよそに水温む
羅（うすもの）の女奈落を連れて来る
視聴率わずかに動く暑さかな

北海道新年　中田　美知子

この冬の北海道は冷凍庫の中に暮らすような温度である。内陸部では最低気温が零下30度近くなり、空気中の水分が凍り光にあたって煌めくダイヤモンドダストも現れ、札幌でさえ日中の最高気温が零下6度なんて日があった。ちなみに零下10度を超えると鼻の穴が瞬間ピタッと凍りつき手袋なしでは指が痛い。この異常な寒さは、温暖化に反抗した地球が、気温が下がるこの季節を利用し自分の体温を一生懸命下げようとしているように思える。

この変化のおかげで北海道は米どころになり、酒米も劇的に改良され北海道の標語も「米チェン」から「酒チェン」になった。道民は米を北海道産に変えようという呼びかけから、日本酒を北海道産に変えて消費しようという合言葉である。

TPPも、北海道新幹線札幌延伸もテレビや中央紙から流れる論調は首都圏からの視点ばかりで、「地方は日本全体のために我慢すべし」という啓蒙を図る内容ばかりだ。もちろん農業改革は必要だし、北海道の農業従事者もTPP反対論者ばかりではない。また北海道新幹線札幌延伸は公共事業復活というより、地域に必要な交通インフラがようやく前進しただけなのである。地方の時代は地域に立脚したメディアがグローバルな思考を忘れずに作り上げていく必要があると実感した新年である。

何てことだ!　中村　敦夫

人生の黄昏期を楽しもうと思っていたのに、何てことだ。福島の原発事故は、私の心の中に鉛の塊をぶちこんだ。

戦時中東京から疎開し、そのまま小中学校を過ごしたのが福島だった。同級生たちが、ひどく苦しんでいる。年寄りをこんな目にあわせていいのか?

議員時代、10人もいない脱原発派として活動したが、警告は無視された。結局、危惧が現実となり、もう取り返しがつかない。無念の一語に尽きる。

この事故は、表面的には国家が、実質的には、電力利権を独占する原子力村の連中が国民を巻き添えにして起こした自爆テロと言える。構図として、特攻型の太平洋戦争によく似ている。

異なる点は、今回の戦争の惨禍は、5年、10年後から現れ、将来にわたり延々と続くということだ。私たちは、放射能という見えない敵に包囲され、耐久戦を覚悟せざるを得ない。

ほとんど防ぎようのない汚染食品の流通によって、人々の内部被曝は累積し、遺伝によって子孫にまで祟る。チェルノブイリから25年、現地の悲劇は今も続いている。原子炉周辺の3ヵ国だけで、放射能由来の健康被害者は700万人に増えた。これから日本で起こることを目撃するために、今年はチェルノブイリへの旅を計画している。

歌は世につれと昔いいにけり　中村　敏男

ドラマに主題歌が欠かせない、と私は思う。何故ならば、私は昔から歌が好きで、洋の東西を問わず、良い歌を聴いたとき、自らロずさんだとき、滂沱の涙を流した経験が幾度もあるからだ。なぜかよく泣ける曲のひとつに「僕は泣いちっち」（浜口庫之助・詩曲とも）がある。

恋人が東京へ行った。だから泣ける。なぜ自分といま住む街に残らないのか。また泣ける。それなら自分も東京へ行こう。という、まあ、見事な発想の転換の物語である。

なぜ「泣いちっち」なのか、「いわえれ」を深く考えたこともなかったが、ぴったり心に嵌りこんだ言葉だった。

それから幾年月、遠くオレゴン州のロケ地で夜空を見上げながらロずさんだ時、なぜか涙が溢れた。もちろんそのときに失恋などロマンスとは無関係だっ

たが、やるせなさを感じていたのかもしれない。

東日本大震災が、多くの人々の心に蹉跌をもたらし、もう幾日か経てば1年が来る。この歌を主題歌にしてドラマを考えている。難しい状況のとき、柔らかく発想を変えて生きてゆく男女の物語を叶うものなら作りたい。

苦しいときに心に滲みる歌は、やっぱりいいなあと思う。さてどなたに相談しようか。

****

年頭所感　長沼士朗

毎年のことだが、息子、娘夫婦が元日に年始の挨拶にやってきた。昨年息子夫婦に初孫が生まれ、生後5ヶ月あまりの赤ん坊の叫び声も入り交じって、久しぶりに賑やかな正月になったが、酒が進むにつれて、息子が「今年の『ゆく年』は感心しなかったね」と語りかけてきた。我が家族には、父親がかつてときどきこの番組に関ったことから、子供の頃からよく「ゆく年」を見る習慣がある。

今年は大震災の死者を弔う中尊寺がキーステーションになっていたが、新しい年が明けて、その中尊寺から東京のスカイツリーの展望台に場面が変わり、美しい夜景が映し出された。それを受けて、中尊寺の女性アナが「美しい！開業したらぜひ見に行きたいですね」と述べた感想が、無神経であると指摘したのである。

そう云われてみると、自分も含めて今の日本人が、原発の問題を現実生活との関わりの中でどこまで切実に意識しているのだろうか、ふとそんなことを考えさせられた。

岩波書店の岡本厚さんの年賀状に次のような一文があった。

「非常事態を生きるということは、一人一人が社会の選択・決定に参加し、責任を負い、真剣にその社会をよくしていこうと努力することです。」

自分の小さな生活の中で、社会に責任を負い、真剣に生きるとはどういうことか、今年はそうした問題をひとつひとつ詰めて考えていかなければならない年のように思われる。

****

端渓に若水たんと吸わせけり　新村　もとお

****

年頭所感　藤久　ミネ

山田太一さんが「テレビってなんてはかないんだろうと感じています」と語っていた。『月刊民放』1月号のシリーズ対談『テレビと社会状況の現在』(後篇)での発言である。山田さんは、大山勝美・澤田隆治さんらを相手に、テレビドラマでも優れた創造性を発揮した木下恵介の功績が、映像を含めて何一つ残されていないことを指摘。「鑑賞眼もねばりがなくなってきている」と続ける。「私たちの年代は初めてチーズを食べたとき、これ何だとか思いましたね。ワインもそう」。しかしずっと接していくうちに「かなり際どいものも美味しく感じたりするようになってくる。早く結論を出しちゃいけないものがあると思うんですよ」。確かにテレビは即断する。ゆっくりと過去を継承する流れは途切れ、刹那の勝負である。「もっと成熟した視点でいまの時代にはこういう内面の劇、夢物語もある」というようなドラマにはめったにお目にかかれない。最近のドラマは醸されていない、成熟した味わいがないと頷いていて、はっと思いついた。『カーネーション』には、乾いた、しかしどきっとする不思議な深い味わいがある。そうだ。今年の放送人グランプリには、渡辺あやさんを推したい。

教育　村上　光一

かつて、世界的な指揮者のチョン・ミュンフン氏から言われたことがある。「あなたは、テレビという強力なメディアのトップにいるのだから、その力を若い世代の教育に役立てるという意識を強くもってほしい。」彼は、そこから、たとえば青少年のための音楽の啓蒙番組をつくってくれるなら、自分はなんでも協力する、という話になったのだが、当時わたしは、適当な言い逃れをして彼をかわすしかなかったし、このことでは正直わたしは非力だった。

いま、テレビの仕事を離れたあと、どういうわけか母校の大学の理事など拝命して、急に「教育」というテーマが身近なものになってきた。そしてこのごろは、テレビを「教育」という面からみることが多くなった。

そうすると、これは自分でも意外だったが、「いまのテレビは結構頑張っているなあ」と思うことが多い。歴史の虚実を裁判劇に仕立てたCS番組とか、坂本龍一氏が若ものといっしょに音楽理論を実証する地上波番組とか。探せば、各局ユニークで智慧をしぼった「教育番組」はけっして少なくない。

折しも、放送番組センター（「放送人の会」には「名作の舞台裏」でたいへんお世話になっています）では、早稲田大学と共同で、放送ライブラリーに保存された番組を大学教育、ジャーナリズム教育のために活用する試みを、公開授業というかたちでスタートさせた。テレビの未来のために、こうした「テレビ的教養」の芽を大事に育てていきたい、と思う。

****

年頭所感　山県　昭彦

近代的工業社会は、その外円に遊民層を生んだ。あそび半分に生きて行ける階層である。良し悪しの問題ではなく、資本主義における必然だったのだ。

しかし今やこの国の遊民はおろか、マトモな仕事人間さえ食って行けぬ窮地に立ち至っている。大企業は震災を口実に、続々と国外逃亡を始めた。逃亡を進出と言い換え、なりふり構わず金儲け路線を貫くココロだ。そのために潰れかけの国家財政からさえ、最後の一滴まで絞り取る決意である。逃げ足は早い。

犯罪が横行する世情を正気とは言えぬものの、本当のワルは姿を見せぬ。と、この時、電気料金の値上げは事業者の義務と権利だ、などと言ってのける男が現れた。一種の勝利宣言であろう。正体が大手を振って登場した。

かくしてこの国はアジア3等国への坂道を、威風堂々転がり落ちて行く。年頭に当たっての抱負なんて、こちらには有るはずもない。遠流の心境こそが、唯一の頼りでもあろうか。

正月雑感

渡辺　紘史

今年の正月ほど、晴れやかな気分になれぬ正月はなかった。3．11について、心の整理をつきかねたまま年を越した所為もある。が、別の理由もある。

昨年12月、ある映画・テレビドラマ賞の選考委員会に出席したが、特別賞の選考でもめた。普通特別賞のうち一つはその年に亡くなった方が受賞する。前の年でいえば高峰秀子さんのような人に与えられる。しかし今回は多すぎた。横澤彪さん、和田勉さん、坂上二郎さん、田中好子さん、岡田茂さん、児玉清さん、秋には原田芳雄さん、杉浦直樹さん。結局、絞ることが出来ず、今年以降、亡くなった方は対象から外すことで決着した。脚本家市川森一さんの訃報が伝えられたのは、その翌日のこと。夏、自らが主宰するソウルでのドラマカンファレンスで、これからのアジアのドラマのありようを熱っぽく語っていたのに。偶然11月にかけた電話に、「胸をやられて、今、順天堂にいるんだよ」と、意外に明るい声が響いた。もしやとは思いつつも、検査入院程度と勝手に断じ、励ます意味も込め、以前から決まっていた、2月の名作の舞台裏「黄金の日々」への出席を、「出かけるのがしんどければ電話でもビデオでもいいから」と、改めて確約させてしまったのだ。

それでなくとも、昨年は同年輩の親戚や、大学同窓生の2人を失っている。そうしたなか、正月、郷里の大恩人と、お世話になった大学クラブの先輩の訃報が相次いで届く。おふたりとも、年末に亡くなったのだという。

これまでこんなに多くの命の喪失に立ち会うときはあっただろうか、と思うが、自らに引きつけて考えれば、こんなことが似合う年齢の域に達してしまったのだということなのかとも思う。つまり、これが「常態」なのだと考えると、合点がいった。いつまでも若くはない。いつまでもこの調子では続かない。今まで、まともに向き合わず、考えようともしなかった死＝「限界」に向き合うしかないのだ。この正月、こう居直ったとき、遅ればせながら、やっと一人前の老人になったことを自覚した。

3・11以降の教訓。登り続ける「坂の上の雲」の先に、もう陽を浴び、輝く雲はない。あらためて、別の新しい坂の上に、新しい雲を見つけるしかない。正月を過ぎたら、私も、老人がこれから登り続ける、「新しい坂の上の雲」を探し始める。

ラジオのページ　その8

被災地にこだまする卒園ソング

武本宏一

昨春のNHK紅白歌合戦は、長渕剛、猪苗代湖ズ、更にはアメリカからVTR参加のレディ・ガガなど、東日本大震災の被災者たちを励ます曲で埋め尽くされた。

さて、こうした有名人たちの応援歌に勝るとも劣らず、いま被災地に大きな感動を与えている歌がある。

「空より高く」

なんとこの曲、今から20年ほど前に公募から生まれた、保育園の卒業式用の歌、卒園ソングなのである。

大震災発生から9日経った、昨年3月20日、盛岡にあるAMラジオ局、岩手放送に、匿名で1本のテープが届けられた。

番組担当者がそのテープを試聴してみると…

冒頭いきなり、愛らしい幼児の声が耳にとびこんで来た。

「いろいろたすけてもらいました。ぼくたちはこどもなので、なにもできませんが、うたをうたったのできいてください」

この幼くも凛々しい〝宣誓〟に続いて、およそ20人ほどの子供たちの元気な歌が始まった。

〝人は空より高い心をもっている
どんな空よりも高い心をもっている
だからもうだめだなんて　あきらめないで
涙を拭いて歌ってごらん
君の心よ　高くなれ　空より高く
高くなれ〟

無邪気で明るい、幼児たちの合唱。思わず心打たれたスタッフが、ラジオの安否情報の合間に放送してみると、忽ちリスナーから「感動した」「ぜひもう一度聴かせてほしい」とリクエストが殺到した。

スタッフはその後、この歌を歌った岩手県内の保育園児や作詞家、作曲家などを取材、更にはこの曲に〝生きる勇気をもらった〟被災者たちの声も合わせて取材、ラジオ・ドキュメンタリー「空より高く～7被災地に届け！園児の歌声～」として昨年12月11日（日）に放送し、これも大きな反響を呼び、日本民間放送が選定する第7回日本放送文化大賞ラジオ部門のグランプリも獲得した。

このパワー溢れる歌声に接するには、パソコンでyoutubeをクリックすればよい。あなたは4万何人目かの訪問者となることになる。

そしてかつては卒園ソングの定番だった「蛍の光」が、この曲の後半で辛うじて生き残っているのを知り、少しほっとするのではないだろうか。

第29回放送人句会

◇平成23年11月9日（水）　◇麦屋
◇選者…星野高士
◇出席…伊藤視郎、上村暁蛙、荻野慶人、鈴木もんど、豊田まつり、中島丈博、新村もとを、橋本きよし、林備後、藤森いずみ、堀川とんこう、森治美、横田理恵、西川阿舟（15名）
◇兼題…神無月、七五三、大根、台詞

【星野高士特選】

捨科白言ひたき夜の煮大根　もとを
長台詞焚火しながら覚えおり　視郎
仏壇に朱き箸添ふ鰤大根　丈博
神無月宙に浮いたる科白かな　治美
離島よりフェリー遅れて七五三　きよし
また一つ古書店消えて神無月　暁蛙
七五三天神様の細道を　視郎
初恋の人逝くたより神無月　慶人

【星野高士選】

留守知りつおとなひゆかな神無月　まつり
丸き肩明日にも大根引かれさう　阿舟
名優が台詞つまづき桐一葉　慶人
アドリブの台詞許してそぞろ寒　丈博
大根の白吸ひ込まれゆく日暮　理恵
モノローグ蜘蛛とあり冬に入る　備後
隠沼は鋼の色に神無月　もとを
木の葉髪大事な台詞言ひ忘れ　阿舟
昨夜(よべ)少し甘くなりたる懸大根　備後
嗚(あお)と云ひ露天湯に入る神の留守　まつり
小三治の鼻光りゐて神無月　きよし
青写真あの嵐寛の極め科白　備後
樽洗い大根洗う月夜かな　視郎
大根煮る台詞直しのはかどらず　理恵
灯して昼なほ昏し神無月　もとを
椋鳥の今日のせりふは七五調　視郎
神になぞ頼むもんかい神無月　とんこう
年金の話などして七五三　もとを
神無月茶柱立ちてほくそ笑む　いずみ
台詞なき忠治の塚や鳥わたる　暁蛙
俎に浄なる白や大根切る　まつり
海鳴りの治まらぬ夜の煮大根　もとを
七五三人生最後の主人公　いずみ
夜話に役者のせりふ神無月　きよし
冬の雨台詞ひとつに動きみせ　治美
幸うすき女(ひと)の通夜なり神無月　もんど
捨てゼリフ愛の言葉か神無月　いずみ
荒き音して鳥翔てる神無月　もとを
舌頭に科白百遍冬に入る　備後
喪服脱ぎちらかしたまま大根汁　理恵
水子らの夜ごとの夢や七五三　丈博
シーベルト測り測りつ七五三　慶人
七五三すれ違ふ子の名も知らず　理恵

【会員互選】

大根の真白き肌に刃を立てる　もんど
神無月買ふ気もなくて道具市　きよし
元恋に台詞のみ込む冬の駅　いずみ
神無月なれど社に人多し　阿舟
ニュース見て妻捨て台詞秋刀魚喰ふ　丈博
大根に古里の土つき来たる　とんこう
神主の祝詞短かき七五三　視郎
建て売りや二ヶ月前の大根畑　暁蛙
左派なりし人の故郷神有月　まつり
初孫がモデルデビューぞ七五三　慶人
血尿の出し日孫の七五三　丈博
狛犬は阿吽のまゝに神無月　備後
気持だろセリフでいふなよくつわ虫　とんこう
朱の橋を晴着が渡る七五三　備後
懸大根太平洋に向きて立つ　備後
秋の空それはこつちの言ふセリフ　慶人
長ぜりふ苦労するロケ木の葉雨　阿舟
台詞覚え悪しきをかこち着ぶくるゝ　阿舟
碁盤より我も跳びたし七五三　いずみ
鰤大根炊きて　褥(しとね)　をひろびろと　まつり
寅さんの啖呵なつかし冬日和　もんど
月一ツ窓に残して友の留守　きよし
ダム半ば沈む古里神無月　とんこう

【選者吟】　高士

風紋を乱す驟雨や神無月
帯解の台詞の如き御挨拶
空き缶を蹴つて上向く神無月
落日に遠きまゝなる千大根
夕空の高さを仰ぎ大根引く
神無月台詞とばして見栄を切る
大根引く大根役者せりふ無く

第30回放送人句会

◇平成24年1月11日（水）◇麦屋
◇選者…星野高士
◇出席…伊藤視郎、上村暁蛙、荻野慶人、鈴木もんど、鶴橋康夫、豊田まつり、中島丈博、新村もとを、橋本きよし、林備後、松尾馬笑、森治美、西川阿舟（14名）
◇不在投句…大山勝美
◇兼題…宝船、水仙、風花、助監督

【星野高士特選】

海原に浮かべてみたし宝船　治美
風花に言うまじきこと噛みしめて　康夫
口重き助監懐炉を用意する　もんど
床の中水仙の香に闇を見る　治美
束ぬるも一輪たるも水仙花　備後
願はくば三陸沖へ宝船　勝美
思ひ切り枕叩いて宝船　備後
風花を邪険に払ふタキシード　暁蛙

【星野高士選】

水仙や自惚れ多き胸の内　もんど
出しやばってAD仕事始めかな　丈博
風花や背筋は猛き毘沙門天　きよし
良き夢は助監督にも宝船　備後
風花は手締めの中に舞ひ落ちる　きよし
助監督背丈六尺悴めり　視郎
助監督楽天的に寝正月　慶人
風花を眉毛に置いて高倉健　もとを
一瞬の愛撫きらめく宝舟　康夫
初詣柏手はまず助監督　視郎
水仙の今年映らず瓦礫原　まつり

風花の舞ひ立つ駅の別れかな　備後
だめ出しに助監もすねる冬の暮　馬笑
一茎に三輪づつや水仙花　阿舟
妻逃げし助監督に遣る賀状かな　丈博
風花の山門に消ゆ後ろ影　慶人
宝船かなはぬ夢の枕かな　馬笑
風花に昔の女立ち出でぬ　丈博
水仙や一輪で描く句読点　馬笑
宝船夢と知りつつ漕ぎ出ん　治美
風花の弘前駅に着く夜汽車　もとを
宝船自分勝手なひとに福　まつり
水仙花直立不動たらんとす　備後
潮騒も鎮まり今宵宝舟　もとを
壺に挿せば水仙の香の部屋に満つ　阿舟
風花や恋の場面にあらまほし　丈博
水仙の色をまとひて君がゐて　治美
冬川原姫様背負う助監督　慶人
風花の街イッセイの服纏ひ　まつり
寒けれど大き声出せ助監督　阿舟

【会員互選】

水仙のふるへるかなた日本海　勝美
江南の風情残して野水仙　暁蛙
宝船重き朝寝に沈みけり　康夫
ほら風花よと連れの雪女　もんど
三春駒店内にあり風花す　備後
ひらひらと風花よぎる猫は去る　馬笑
風花にもの売りの声静まりぬ　治美
この歳になり初めての宝船　阿舟
風花の時計塔下人を待つ　勝美
寄り添ひて五輪一茎水仙花　まつり
薄軒早や乗り出せる宝舟　もとを
風花の消えし空気のほの湿り　まつり
去年今年走り廻りぬ助監督　治美
風花の遊ぶ奈良町辻地蔵　もとを
初夢は明智光秀助監督　慶人
百万の水仙の花海を向く　視郎
風に揺れ口紅水仙なにを告ぐ
闘伽桶に水仙揺れて白き足袋　丈博
水仙や水上バスの停まるたび　視郎
風花を追ふ眼の底のかゆみかな　もと
水仙よ知らずや庵の主逝くを　慶人
かざはなに触れなば影の女消ゆ　馬笑
風花や社に坐す記紀の神　きよし
水仙に添えて七十路の初硯　康夫
宝船敷いて寝入りの落付かず　もんど
漕ぎ手にも一夜の夢を宝船　馬笑
助監督一緒に舞ふか風花と　治美
荒海に木の葉の如き宝船　備後
初風呂のバックショットは助監督　もとを
人に死し池辺に生れて水仙花　もとを
風花が鹿の子絞りに舞ひ落ちる　暁蛙

【選者吟】

神棚にしばらく置いて宝船　高士
水仙の香にあづけたる詩心
蜉（かげろう）の手でカンペ出す助監督
厠へと誰かが佇ちて宝船
水仙を離れてよりの香の強し
風花に灯ともし頃の街の顔
風花や弁当買ひに助監督

次会放送人句会
◇3月7日（水）18時頃～
◇於…赤坂・麦屋（Fax03-3586-0056）
◇兼題…如月、蛤、椿、どや顔

新刊紹介

来世は野の花に

秋山豊寛著（六燿社）

「わが在所にもセシウムが降ってきた」と、福島県田村市滝根町の阿武隈山沿いの麓で椎茸栽培を営んできた著者は、3・11を境に原発難民の〝逃避行〟に巻き込まれる。「私自身も、放射性微粒子を、口から鼻から吸い込んだ可能性があり、内部被曝による晩発性障害のおそれを抱え込んでいます」著者がやがて1年、その間「疎開先」で考えたこと、それ以前に、都会のテレビ記者がなぜ、半ばにして「転生」の道を歩むにいたったか。そもそも「農ある暮らし」とは何か。農村での実践をふまえた思索の書である。といって中央の論壇への地方からの参加、異議申し立てにとどまる書ではない。

田圃の畦から田の中の微小な生物の息遣いを観察しながら生物の多様性を思い、「オテントウサマの有り難さ」にふれる日々。喧伝される農業の大規模化とは原発エネルギーに支えられたマーケット本位の虚の農業だとし、小川による小水力を力に変えて生まれる米作りに農の本質をみる。「原子力村」とは全く反対の「有機栽培村」が全国の農村で生まれ「野良仕事の楽しみ」を求める。中央の論壇とは無縁の中堅農家の地に足のついた農業ジャーナリズムの情報交換がある。そうした農業へ転身し、かつて島木健作が「生活の探求」で求めた転向、や「転生」のすばらしさを四季の中でかみしめる。バイコヌールの宇宙基地から阿武隈の里へ。16年という長い年月を経て思索が結ぶ矢先の原発禍。「です、ます」調で論すように語る文脈はどこか、現代の「方丈記」か「徒然草」の気配がする書である。（1，600円）

（M）

原発難民日記

秋山豊寛著（岩波ブックレット）

「春になって朝から晴れた日はじっとしていられない」という秋山氏の農作業の話は楽しい。そこに原発である。彼は4月にはモスクワに招かれ、体内被曝の検査をしている。宇宙からの視点と毎日の農作業からの視点を持つ日記なのである。（560円＋税）

第30回・名作の舞台裏

11年11月23日・横浜情文ホール

15歳の志願兵

（NHK・10年8月15日放送）

パネリスト

池松壮亮＝配役　藤山正美役

高橋克典＝配役　藤山順一役

大森壽美男（脚本家）

川野秀明（演出　NHK）

磯　智明（プロデューサー　NHK）

司会　渡辺　紘史（放送人の会）

主催　放送人の会・放送番組センター

ドラマは、旧制愛知一中のOBで当時を知る江藤千秋（故人）が編纂した『積乱雲の彼方に～愛知一中予科練総決起事件の記録』（法政大学出版局）を資料に、戦時下の旧制中学をめぐる実話をドラマ化、二人の若者のこころの動きを中心に、生徒や教師や家族の苦悩を描くことで戦争の内面を綴り、多くの感銘を与えた作品である。

『名作の舞台裏』で取り上げる作品としては比較的地味な作品で空席が危ぶまれたが予想を裏切り、戦時世代の高齢者や戦争を知らない後続の戦後世代、そして孫世代にあたる若い層で会場は超満員となった。特筆したいのは会場には旧制愛知中学のOBをはじめ、同じような体験をもつ人たちが目立ったことである。さなきだに開戦70年に東日本大震災が重なり、国家のありようや本質が問われている年であることと無関係ではないからだ。

昭和18年。学徒出陣に続き、47名の志願兵応募を強制された中学校の教師や生徒たちがいる。15歳前後の生徒を戦場に送ることの賛否両論の教師たちや時代風潮に流される生徒もいれば、未来を描き思い悩む生徒もいる。

司会　詩の好きな文学少年役で、学内の熱い空気をクールにみてる役だが…

池松壮亮さん

池松　戦争を知らないどころか想像さえできない役でしたが、世代的にも接近しているので15歳を自分の中に問い、吐き出せるのではないか。今ではできない10代最後の大事な作品で、珍しく父から励ましのメールが届きました。

司会　高橋さんは池松君の父親で英語教師でもあるという役でした。

高橋克典さん

高橋　父親と教師の立場の相克。私も今47歳になりますが、ラストで戦死した友の日記を読むシーン。子供たちが再びああいう日記を残してはいけない、なんおための教育か国家か、考えさせられました。

司会　地元の戦争秘話をユニークなドラマにした名古屋NHKのねらいとは何だったでしょう、磯さん。

磯　智明さん

磯　当時の資料を漁り、二人の生徒の友情の揺らぎ、教師や校長をめぐる内面のドラマの背景をしらべ企画したのは、今日の常識で推測する反戦ヒーローものにはしたくなかったから

司会　かつて倉本聡さんはドラマでは大きなウソをついてもいいが、小さなウソはつくな」と言ったが、戦時中の旧制中学の風俗、雰囲気がよくでていましたね、川野さん

川野秀明さん

川野　今の高校とは全く違う雰囲気をいかに出すか。OBから聞いたり卒業写真を見て、制服姿がまちまちだったり靴に混ざってゲタ履きがいたりする旧制中学風俗に当時の青春を再現することだった。配属将校の檄声に魅了され、志願の挙手で覆われる講堂の熱く、凍りつくような空気感ですね

司会　「クライマーズ・ハイ」や「風林火山」などNHKが多い大森さん、この作品で留意した点を。

大森壽美男さん

大森　ドキュメンタリーで取り上げられる素材だが、ドラマなら内面を描けるのではないか。愛国心に魅了され、続々と手を挙げる生徒たち、あのシーンをむしろ逃げずに克明に描くことで、戦後の日本にも通じる危うさ、今でも学校には同じような状況があり、それを示唆できたらという思いがありました。けっして過去の悲劇ではない。

《会場の声》原作の記録集に関わった井上信一郎さん　当時は3年生で今83歳ですが、脚本や演出、俳優の皆さんによって事実以上に見事な出来栄えで、そのことが言いたくて出席しました。

「戦争という重いテーマ、今日とつながっている」「テレビドラマはカメラに向かって演技してるという偏見を破った作品でした」など、会場からも感動の声が次々とあがった。（構成　松尾羊一）

放送人グランプリ2012（第11回）推薦投票のお願い

2012年1月吉日

放送人グランプリ事務局長　堀川とんこう

「放送人が選ぶ放送人の賞」として2002年に発足した本賞も、放送関係の知る人ぞ知る賞としてご好評を得、１１回目のノミネートの季節となりました。

ノミネート投票ができるのは、放送人の会の会員に限ります。

対象は、主として2011年４月から2012年３月までの一年間に、番組制作・報道、研究調査ほか放送に関わる活動で、顕著な業績を残したと思われる個人またはグループ（当会の内外を問わず）をグランプリとしてお選びください。ほかに、めざましい活動で放送界に新風を吹き込んだ人などに、特別賞や奨励賞などが贈られます。

会員の推薦投票後、選考委員会によって受賞者が選ばれます。会員各位の豊富なご経験と高い見識を活かしてぜひご投票くださいますようお願いいたします。

1．**別紙投票用紙**により、グランプリ候補とその推薦理由、ほかに贈賞したい人またはグループを記入ご投票ください。

2．締め切りは**2012年3月31日必着**。放送人の会事務局あてにＦＡＸ、または郵送かメールでお送りください。

3．４月上旬に選考委員会で内定、同下旬に幹事会承認、５月１９日（土）放送人の会総会の日に贈賞式（於ＮＨＫ青山荘）を行う予定です。

ご参考までに、最近２年間の受賞者はつぎのとおりです（一部敬称略）。

2010年（第9回）

グランプリ	堀川惠子（ETV特集「死刑囚　永山則夫～獄中28年の対話」（NHK））
特別賞	ドラマ「JIN―仁」（TBS）制作スタッフ・キャスト一同 里見繁（「DNA鑑定の呪縛」（毎日放送）ほかドキュメンタリー）
奨励賞	三好健太郎と「着信御礼！ケータイ大喜利」（NHK）制作スタッフ一同 辻本昌平（ドキュメンタリー、カメラマン、脚本家） 芳崎洋子（FMシアター「風に刻む」脚本）
特別功労賞	故・久野浩平氏

2011年（第10回）

グランプリ	ドラマ「大阪ラブ＆ソウル　この国で生きること」制作スタッフ（NHK大阪）
特別賞	大森淳郎（NHK）、　中崎清栄（テレビ金沢）
奨励賞	ETV特集「なぜ希望は消えた？～あるコメ農家と震が関の半世紀」制作スタッフ（NHK） 高橋竹山生誕100年記念番組　ラジオドキュメンタリー「故郷の空に」制作スタッフ（青森放送） 「きらっと生きる　バリバラ～バリアフリー・バラエティ」制作スタッフ（NHK大阪）
特別功労賞	故・和田勉氏、故・木村栄文氏、故・守分寿男氏、故・横澤彪氏

会員名簿

2012.01.23 現在

【あ】青木裕子 赤井朱美 秋田完 秋山豊寛 雨宮望 新井和子 【い】石井彰 石井清司 石井ふく子 石高健次 石橋冠 磯野恭子 磯村健二 市岡康子 市村元 一色伸夫 伊藤雅浩 井上良介 今井義典 岩澤敏 【う】上村忠 碓井広義 臼杵敬子 歌田勝彦 宇野昭 【え】江口展之 遠藤利男 遠藤ふき子 遠藤雅充 【お】大蔵雄之助 太田敬雄 大西康司 大西文一郎 大原れいこ 大山勝美 大類啓 大脇明 岡弘道 岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明 小河原正巳 沖野暸 荻野慶人 小田久榮門 織田晃之祐 【か】加賀美幸子 各務孝 片岡敬司 勝部領樹 葛城哲郎 加藤滋紀 加藤辿 加藤義人 金子登起世 兼歳正英 金平茂紀 加納孝夫 鎌内啓子 上安平洌子 鴨下信一 川口健一 川口幹夫 河邑厚徳 河村正一 【き】岸田功 北川泰三 北川信 北出晃 北村美憲 北村充史 木村成忠 【く】楠美昌 工藤英博 久保志穂 隈部紀生 【こ】小池勝次郎 河野尚行 児玉久男 後藤和晃 小南武朗 近藤晋 今野勉 【さ】斉藤伸久 斉藤秀夫 斎明寺以玖子 酒井美樹男 寒河江正 坂元良江 桜井均 佐々木彰 佐々木欽三 佐藤年 澤田隆治 沢田隆三 【し】重延浩 重村一 静永純一 嶋田親一 清水満 下崎寛 下重暁子 城菊子 白井博【す】菅野高至 杉澤陽太郎 杉田成道 鈴木昭典 鈴木克明 鈴木典之 鈴木道明 須磨章 【せ】せんぼんよしこ 【そ】曽根英二 【た】高島秀之 高橋一郎 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中則広 田原英二 田原茂行 【ち】千葉勉 【つ】辻本昌平 露木茂 鶴橋康夫 【と】土居原作郎 堂本暁子 戸田佳太 外崎宏司 豊田由紀子 豊原隆太郎 【な】中崎清栄 中島俵 中田美知子 永田浩三 長沼士朗 永野敏一 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村耕治 中村敏夫 中村英美子 中山和記 難波秀哉 【に】新村もとを 西ヶ谷秀夫 西川章 二宮文彦 丹羽美之 【の】信井文夫【は】萩野靖乃 橋本潔 林健嗣 林裕史 原由美子 原田庸之助 原田令嗣 【ふ】深町幸男 藤井チズ子 藤田晋也 藤久ミネ 【ほ】星田良子 堀川とんこう 【ま】前川英樹 松尾羊一 松平定知 松前洋一 松本明 松本修 松本国昭 【み】三上義智 水上毅 水野憲一 三原治 三村景一 三村千鶴 宮川鑛一 三宅恭次 明神正 【む】村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】諸橋毅一 【や】八木康夫 矢島良彰 薮内広之 山県昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】横山英治 吉澤保 吉永春子 吉村直樹 【わ】渡辺紘史

新入会員

三原 治 構成作家。作品「筑紫哲也NEWS23第2部」「TBSスーパーワイド」「サンデーモーニング」「めざましテレビ」「森本毅郎スタンバイ!」など。現在、日本放送作家協会理事。脚本アーカイブ委員長代行。

久保 志穂 番組P&D。作品「ハイビジョンふるさと発・嵐の気仙沼」「福祉ネットワーク」(Eテレ)「ヒューマンドキュメンタリー・がれきを踏みしめて」。現在、NHK制作局第1制作センター文化福祉番組部ETV特集班。最年少会員。

第31回名作の舞台裏

黄金の日々

(NHK 1978年放送、全51話)

●2月21日(火)午後1時30分~

●横浜情報文化センター・6階ホール

ゲスト

松本幸四郎(出演)竹下景子(出演)、近藤晋(制作)高橋康夫(演出)

司会 渡辺紘史(放送人の会)

脚本家市川森一の代表作で、放送ライブラリーでは、この作品の他市川さんの作品をテレビ55本、ラジオ6本公開しています。

●会員の皆様の席は確保してあります

放送人の会忘年会

12月の幹事会のあと、恒例の忘年会を渋谷1丁目ダイヤモンド・ビル地下の「プリーズ・オブ・ペイ」で行った。テーブルには最近流行のタジン鍋。ワインを飲みながらの談論風発。秋山豊寛氏も参加してフクシマ難民体験を綴った本を皆さんに配っていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

編集後記 ▼年頭所感の原稿を多数の方からいただきました。ありがとうございます。やはり東日本大震災、原発に関するものが多いですね▼次号は「放送人グランプリ下馬評座談会」を掲載する予定です。参考にしますのでこの1年の番組に関する情報、資料をお寄せください。(視郎)